

“ストップ ザ BS崩壊！！”
よみがえる団へのバイブルに！

創始100周年を機に全組織を挙げて”逆スパイラル現象“に歯止めをかけようー

< 日本連盟 教育本部 平成17年度・18年度組織拡充委員会事業の総括報告 >

平成19年3月

ボーイスカウト日本連盟 教育本部
組織拡充委員会

目 次

全国 2791 名の団委員長の皆様へ	1
表-1 ボーイスカウト日本連盟加盟登録者数の推移	4
表-2 平成17年度・18年度組織拡充11事業参加県連盟状況表	5
県連盟組織拡充責任者他の関係者と日本連盟組織拡充委員との対話 抄録 <11事業・41県連盟関係者>	7
A. 加盟員激減歯止策	
1. 中途退団抑止策	8
2. 新規スカウト確保策	10
B. 組織活性化策	
1. 団活性化策	11
2. 地区活性化策	14
3. 県連盟活性化策	15
4. 日本連盟活性化策	19
ボーイスカウト運動の危機的状況を憂いて組織拡張・拡充のための提言 <愛知連盟副連盟長・日本連盟評議員 宇野眞之氏> ...	21
私のボーイスカウト経歴について	22
「評論家ではどうしようもない、実践者でなければいけない」	22
ボーイスカウト運動との関わり「ボーイスカウトのように優れた組織、これに勝るものはない」	22
県連盟としての取り組み全国1番を目指す「リーダーの数じゃない。登録人数はスカウトだ」	24
日本連盟における私の取り組み	24
所属地区における自団の取り組み	26
地区組織として「体質改善の決め手は地区」	28
組織拡張・拡充における提言	28
指導者の資質向上が最も重要	34
今までの実践に基づく提案項目「記録するという事は非常に大事」	35
身体で語る指導者が感動を与える	35
一人ひとりを指導者に、個々のスカウトの能力も活用すべき	36
スカウトの基本的欲求を確認、「それが満たされているかどうか」	36
意欲と自主性を育む、「やる気にさせるにはどうしたらいいか」	37
宇野講師提供「参考資料綴り」	38~

全国2791名の団委員長の皆様へ

「団の炎は燃え盛っていますか！」 燃え盛っている団、オキがやっと点いている団、燃え尽きそうな団、若木で今は小さい炎だけれどももなく燃え上がるであろう団……。全国の団・地区・県連盟の皆様が、スカウティングの火を燃え盛るよう日々の活動でご努力されておられますことと拝察申し上げます。

我々、日本連盟組織拡充委員は与えられた2年間という極めて短い任期ではありましたが、お陰様で合計11回の事業を通じて全県連盟の実に87%に相当する41県連盟の皆様と組織拡充に関する真摯な対話を行うことができました。

この全国の関係者との議論を踏まえて、よみがえる団へのバイブル「ストップ ザ BS崩壊！！」を纏めさせて頂きました。各団におかれましては、自団の活性化にご活用戴ければ幸いです。

火を絶やさぬ為に薪を！ スカウティングを絶やさぬ為にスカウトを！！

日本連盟教育本部組織拡充委員会
委員長 渡邊富昭

スカウトの激減現象が一向に止まりません。このままでは10年後に更に半減してしまうと心配される重鎮がおられます。最盛期の昭和58年度に1団平均60名であったスカウト数が、ついに40名(標準団は68名)になってしまいました。(表-1参照)

この数が更に半減するということは、当然の帰結としてスカウト教育の基本である班制教育の崩壊と財政破綻を意味しています。つまり、「スカウト数減少！ スカウト教育効果減少！ 財政窮乏！ 指導者のやる気減退！」『スカウト数の更なる減少！ スカウト教育効果の更なる減少！ 財政の更なる窮乏！ 指導者やる気の更なる減退！』と、逆スパイラルにどんどん陥っている訳です。

世界で最も優れた青少年健全育成運動とされているボーイスカウトであるにも関わらず、理事長、常務理事、教育本部(総)コミッショナー、組織拡張(総務)委員長、事務局長など日本連盟の最高責任者が家庭や仕事や場合によっては命を縮めてまでも尽力されて来たにも関わらず、逆のスパイラル現象に歯止めがかからないのは何故でしょうか？(表-1参照) 当委員会発足当初からこの点に注目して分析をしてきましたが、その結論は、永年の組織疲労が蓄積した結果、

日本連盟を構成するあらゆる組織（団・地区・県連盟・日本連盟<奉仕者・有給者>）のベクトル合わせが、残念ながらできていないのではないかと？

日本連盟を構成するあらゆる組織の経営資源（人 団委員を含む指導者、物 ボーイスカウトノウハウ・施設・設備など、金 財政）の適正な配分が、残念ながらできていないのではないかと？

ということでありませう。

では、我々組織拡充委員会は、与えられた2年間という極めて短い任期中に何を為すべきか？ということでありましたが、「かい(權)より始めよ！」のことわざに従って過去の因習に囚われずに果敢にできることから始めていくことになりました。

それが、「団を束ねる県連盟の組織拡充責任者他の関係者と同じ目線で胸襟を開いた真摯な対話を段階的に実施して、その対話の中から、“ストップ ザ 逆スパイラル策！”つまり“ストップ ザ BS崩壊！！”策を抽出し、整理して公表すること」であります。この2年間に合計11事業を実施し、全県連盟の実に87%に相当する41県連盟の関係者(表-2参照)と対話をすることができました。

県連盟組織拡充責任者他の関係者と日本連盟との真摯な対話の場 <合計11回・41県連盟 87%>

平成17年度全国組織拡充セミナー(平成18年1月) 大分県連盟訪問(平成18年1月) 平成18年度全国大会テーマ別集会(平成18年5月)
愛知連盟訪問(平成18年6月) 14NJ組織拡充ブース(平成18年8月) 京都連盟訪問(平成18年9月)
奈良県連盟訪問(平成18年12月) 秋田県連盟訪問(平成18年12月) 福岡県連盟訪問(平成19年1月) 栃木県連盟(平成19年1月)
平成18年度全国組織拡充セミナー・宇野真之氏講演(平成19年2月)

その結果を一言で申せば、次の3点に要約されます。

2719個団の奮起に期待する以外になく、全国の団委員長がベクトルを合わせ、仲間意識と危機意識を強めてスクラムを組もう！
団は、スカウト教育の基本に戻り、充実した班制教育に基づく進歩制度と絶対評価教育を確実に実行しよう！
日本連盟・県連盟・地区は、組織をスリム化して“小さな政府”を目指し、有為な人材を団に戻そう！ 財政基盤を健全化しよう！

県連盟組織拡充責任者他の関係者と 日本連盟組織拡充委員との対話 抄 録

平成17年度全国組織拡充セミナー(平成18年1月) 大分県連盟訪問(平成18年1月) 平成18年度全国大会テーマ別集会(平成18年5月)
愛知連盟訪問(平成18年6月) 14NJ組織拡充ブース(平成18年8月) 京都連盟訪問(平成18年9月) 奈良県連盟訪問(平成18年12月)
秋田県連盟訪問(平成18年12月) 福岡県連盟訪問(平成19年1月) 栃木県連盟(平成19年1月)
平成18年度全国組織拡充セミナー・宇野真之氏講演(平成19年2月)

注：本抄録は、平成17年度・18年度の2年間に実施した上記の11事業において、41県連盟の関係者と対話をさせて頂いた中から主な意見を抜粋収録したものです。

平成17年度・平成18年度

ボーイスカウト日本連盟 教育本部
組織拡充委員会

A . 加盟員激減歯止め策 1 . 中途退団抑止策

中途退団理由

1. 自団で「中途退団の理由」についての調査と分析を団を挙げて行なった。退団の原因は、プログラムが面白くない 隊長が嫌い 部活やスポーツクラブが忙しい (塾や自習の) 受験勉強をしっかりとやりたい 経済事情が許さない の5大要素であり、や の理由はなかなか表に出てこない。
2. 退団の根底にあるのは「スカウトの間に友情が育まれていない」ことである。スカウトの間に友情が育まれていれば、自ら退団を選択することは無い。
3. 部活や塾はボーイスカウトの競争相手ではないので、共存するための教育システムを開発しなければならない。日本連盟にBS教育研究所を設置して専門家による研究をすべきではないか。

班制度と進歩制度

4. 自地区で調査の結果、菊や富士の進級スカウトの輩出率と中途退団には因果関係があることが判明した。換言すれば進歩制度と団の経営が密接にリンクしている。すなわち「確実な班制教育に立脚した実効ある進歩制度」が中途退団抑止の最大の武器であることを再確認した。
5. ジャンポリーへ参加したスカウトが班制度の充実感を体験して日常の活動でも希望しているが、実現が難しい。
6. 競争原理を導入し、各団による対班競点(ボーイLHB「対班競技」)を実施するとスカウトの出席率が上る。
7. 富士章、菊章の進歩を達成しているスカウトには、どんどん与えるべきであり、また全員が取れるように指導すべき。後輩が先輩に憧れを持てる環境作りが大切。

絶対評価教育

8. ボーイスカウト教育の最重要なものに「隊長と一人のスカウトとの関係における絶対評価教育」があるが、それが行われずに単純な序列だけの「相対評価」になってしまっているようだ。研修所や実習所でこのことの指導が削除されたと側聞したが、本当だとすればボーイスカウトは、自滅の道を選択したことになる！
9. スカウティングは「落ちこぼれ」を出さない教育活動であり、「群」で活動し「個」を育てる。
10. 個性を伸ばす教育を推進し、皆がそれぞれの立場で見守る。

休隊制度

11. どんな親でも子どもが年少から青年に成長する間にボーイスカウトだけを一生懸命やる姿を求めている。このことは自分の子供に置き換えてみれば当然のこととして理解できる。さすれば年代によって「勉強に精を出す時期」や「運動を一生懸命やる時期」があって然るべきである。そこで堂々と「約束の期間、休隊をして目的を達成して復帰する」という団が公認した「休隊制度」が必要になる。
12. 中途退団抑止としての「休隊制度」について県連盟とか地区で制度の設置はあるのだろうか？ 「休隊制度」は団の会費、運営経費に影響してくる部分があるためになかなか設定されない。

プログラム

13. 中途退団してしまう理由のひとつはプログラムが楽しくないからである。プログラムは集会毎の単発なものであってはならない。どうやって進歩制度と結び付けていくか。最近の指導者は、カブブックや進歩制度を軽視している。
14. スカウト全員で100kmハイクの出迎えをしている。拍手で迎える後輩は「先輩のようになりたい」と思い、迎えられた先輩は自信と次への意欲が持てる。
15. 毎年50kmオーバーナイトハイクを班制教育の一貫として実施しているが、極めて厳しいプログラムであるにも関わらずスカウトの出席率が非常に良い。グリーンバー反省会でもスカウトが必ず来年もプログラムに取り入れることを決めている。これは、ボーイスカウトならではのチャレンジでたくましいプログラムの代表例であろう。指導者は、安全を理由に安易に待ったをかけるのではなく、如何に安全を確保しつつ実施するためのバックアップ体制を固めるかに力点を置くべきで、当日は多数の指導者が完璧なサポート体制を敷くことを心掛けている。
16. 進歩制度にしてもプログラムにしても、3～4班あって切磋琢磨しないとつまらない。1コ班だけの活動では例えプログラムが良くても「つまらない」と感じる。子どもが多くいる班制度を充実させなくてはならない。
17. 楽しいプログラムとはボーイスカウトでないと出来ないプログラム。例えば、火を使う様なプログラムである。そういった面白いプログラムを提供するには、大人がスカウトをしっかりとサポートすること。これが大人の責任である。各種届けを出すべき所にきちんと提出したりのフォローをしてあげることにより、子どもたちが一見危険と思える様なプログラムにもチャレンジできることになる。
18. 新規の加入者はあるが、中途退団者が多いために減少している。中途退団者は落ちこぼれではなく、興味がスカウト活動以外へ移っているのが現状。本セミナーにはプログラム担当者の参加がないのが残念。先ずプログラムを大切に在籍スカウトの満足度を最優先にすることが中途退団の抑止につながると思う。
19. 子供に夢と冒険を得させるにはどうすればよいか、という視点に立つべき。
20. 雪中訓練、富士青木ヶ原探険、川下り等のボーイスカウトならではのダイナミックな体験を提供している。
21. スカウトでないと出来ないプログラムを提供する。

ベンチャースカウト

22. ベンチャースカウトがこの教育の成果であり、後輩達が憧れる姿になるようにプログラムを配慮すべき。
23. ベンチャースカウトを活用し、全てをどんどん任せて前面に出していく。
24. ベンチャースカウトを団行事(BP際、入隊・上進式)の司会・進行などへ積極参画させる。
25. 中途退団者抑止のためにはベンチャーに上進してからつまらなくて辞めていく子供が多い。その対策についての団内の会議で、「ボーイ隊で折角班制度の面白さを身につけたのに、ベンチャー隊上進と共に解き放たれ、孤独と戸惑いから嫌になってしまう例が多い。そこで、ベンチャー初年は、ボーイ隊とベンチャー隊の中間的な隊運営を行って徐々に解き放つことにすることを決め、早速実践している。

ニーズ志向

26. 教育規定の「一貫したプログラムに基づいて教育する」の内容が、もはや時代のニーズにマッチしていないのではないか？

27. 各県連盟での調査結果も突き詰めてみれば中途退団の大きな理由が保護者と隊リーダーの関係、連携の悪さであり一般社会で言えば「消費者動向の把握」が立ち遅れているからではないか。

28. 現代は、商売でも何でもニーズ志向でなければ生きてゆけない。その点ボーイスカウトは、未だにニーズではなくシーズ志向でやっているのではないか。

頑張らなくていいから、具体的に動けばいいから！

27. 組織拡充に関して新規加盟者は何とか獲得しているので中途退団抑止問題を重点的に議論する必要がある。なぜ続けないかは、活動がスカウトにとって魅力が無く楽しくないから、が大きな理由である。団や隊は短・中・長期の簡単なことでいいから目標(施策、目玉商品)を定め、それを確実に実行することである。先ず行動すること 『頑張らなくていいから、具体的に動けばいいから！』というある著名人の言葉がスローガンになるだろう。まず出来る目標を定め、動くことが重要である。

地域で一緒に幸せに

28. 保護者連絡網の構築。親を巻き込む。親を巻き込んで「地域で一緒に幸せになろう」がテーマにならないか。

29. 「保護者・近所の人・皆で幸せになろう」が合言葉。地域との連携も独善的な連携でなく相手の身になっての連携が重要。

A . 加盟員激減歯止め策 2 . 新規スカウト確保策

逃げ口上

1. 「子どもがいらないから集まらない!!」と言うのは団委員長への逃げ口上である。子どもは集まる所には大勢集まっている。

ビーバー入隊時期

2. ここ毎年約500人もの減が続く。追加登録申請が全く無い。最近効果があった対策としては「100ある失敗を語るのではなく、成功例を増やそう!」の実施。各地区エリア、特に郡部において地域に根ざした対応として視聴率が高いケーブルテレビのBS取材を積極的に受けたことからBVSやCSの新規加盟数が増えてきた。又、理由は不明だが女子の加盟はなぜか3～4月が多いこともあってプログラム年度の9月開始が合わなくなっている。募集は4月の方が効果があるので、BVSやCSの募集は3～4月のランドセルが目立つ時期にスカウト展を開催するなどしている。現状の問題点を挙げれば、地区の停滞、情報の遅延、指導者の質的低下、団委員長の資質・仕事内容の問題、上進率低下などがある。今年の継続スカウトにアンケート調査を実施して実態を把握していく予定。これでプログラム内容や人とお金の問題を明確にしたい。その他掛け持ちの長役務の問題があり、硬直化の要因として是正を実施中。なかなか成功事例もなく苦労している。

3. BVSの入隊問題は現在幼稚園年長組の入隊は9月からであるが「準会員」の柔軟な組織なら4月からの設定として9月までの加盟員登録前の「青田買い」も可能となる。そうすれば共済制度にも加入できるので事前キープが可能となる。

新規スカウト募集

4. 新規入隊を獲得する営業ツールは「母親の口コミ」が最大の要因である。
5. 所属県連盟ではモデル県連盟の指定を契機に「どのような募集展開を行えば子供たちを集められるか？」の協議を行い、チラシの配布にしても事前に正確な情報を集め、地域や地区を限定し実施した。結果、けっこうな反応があった。先ずボーイスカウトが活動し、募集も積極的に行っていることを地域に見せていかないと効果は現れない。
6. 募集活動は、スカウト活動のPRにもつながっている。団や地区で配布するパンフレットはソースの共有化によってコストダウンが図れると思うので相互協力したい。
7. 日本連盟は、加盟員募集について具体的にどんな施策をやっているのか？何もしていないのではないのか？世界ジャンボリー招致に多額の資金を当てるそうだが、その資金を募集に使って、ボーイスカウトの認知度を高め加盟員増加に最大限の努力をすることを優先できないのか？マスコミを使ったPRや団が使うチラシを無料配布するとかやるべきことは沢山あるのでは。

入団説明会に補助金

8. 口コミ、広報誌、チラシ、ポスター、HPなどの募集ツールを最大限活用しても入団説明会を定期的、かつひんぱんに開催して獲得のための詰めを行わなければ、「効果的成果」は得られない。自県連盟では入団説明会のひんぱんな開催促進を目的として補助金を出している。

学校区

9. 団の募集区域と学校区問題について「学校区指定制」が良いかフリーが良いかの論議をしているが、地区では「入団者側に選択させるべきであり、団は魅力のある団作り努力の競争をすべきである」との意見であった。今の時代は商売でも役所でも需要者側に選択権がある訳でこの世論に背を向けることは出来ない。団同士の、良い意味での競争原理が働かないと前進しないし、汗をかかなくなる。

B . 組織活性化策 1 . 団活性化策

組織・団委員長

1. 団の活性化のためには、まず現状分析をしっかりと行う必要があり、本日配布した「新アクションプラン」を活用してほしい。本日資料で配布した団活性化の成功例の中には隊にも組織拡充の役割を持たせている団もある。是非参考にしてほしい。
2. 団委員長は孤独であり一人悩むことが多い。よって、団委員長同士が横の連携を保ち同じ悩みを共有する者として日本全国の団委員長が連携することにより、モチベーションを高めることが出来る。団委員長の全国大会を恒常的に開催しては如何か？
3. 団委員長のモチベーションを上げる方策として団の統合を行っている。人数の少ない団に班対抗の面白さをわかってもらう為には統廃合も必要である。
4. 団委員長は、スカウトの理念・目標と自己実現のベクトルを一致させること。つまりモチベーションマネジメントが出来れば遣り甲斐に繋がるのではないか？

5. 加盟員が23年間連続マイナスという連続右肩下がりの沈滞ムードの元では、地区や県連盟のデータを突きつけ督励する手法では効果は生まれない。個々の団の自覚と奮起以外に逆スパイラル現象に歯止めをかける方法はない訳で、今こそ全国の団委員長がベクトルを合わせて仲間意識と危機意識を共有してスクラムを組むことが極めて重要ではないかとか。
6. 所属する団では組織拡充面において中途退団の抑止は隊指導者、新規加盟員獲得は団委員と、明確に役割分担をして対応している。そのためには、団委員数が欠如すると新規獲得がままならなくなる。
7. 団の運営を教育と経営に分けて経営問題は団委員を積極活用している。そのためには団委員のモチベーションを高めなくてはならないが、日本連盟が団委員にも、遡って特別年功章を授与することになったことは朗報である。今年度のかっこう章も「団一筋」の方が大勢授章されたように見受けられ従来上部組織の奉仕者優先であった方策を大転換されたのではないかと。これらの有効活用により更に団委員を戦力として活用したいと思う。
8. 自団で試算の結果、スカウト数1000人の団を運営するために必要な年間総作業時間が約15,000時間であった。これを相当数の指導者(団、隊)で分担している訳であるが、内30%以上は教育以外にかかる時間数である。「健全なる団経営のためには団委員の有効活用が不可欠」であることが歴然としている。団委員の有効活用が図れない団は隊指導者が教育以外の作業時間を多く取られて肝心な教育が疎かになる。
9. 出て来ない団の参加促進策 団委員長の「こだわり」を刺激する 出前研修会で乗り込んで行く
10. 班制度が行えないところでは、団委員長の主導で団を越えた合同隊での活動も実施している。
11. 団委員長のラウンドテーブル・交流会を開催し、相互のコミュニケーションを図っている。
12. 「この運動の基本は団である」を前提に、団として団委員長を中心に運営ができているか？ 団委員会の組織がちゃんと機能しているか？ その部分がしっかり構築されていないと進歩も組織拡充も駄目。活性化のためにはどのような対策を構築し、何を行うのかを討議すべき。
13. 古手の団委員長に問題が多い。「絶対に退任しない」と宣言している人もいる。団委員長の強力なリーダーシップが今こそ必要であるのに困ったものだ。定年制を引くことにして県連・地区役員を70歳と定めたが、団委員長のところでストップが掛かりそのままになっている。
14. 「安定した新入団員需要があった時代の団委員長は“さしみのつま”で良く、良い指導者を作ってさえいればそれなりの成果を上げることが出来た。現代の厳しい経営環境にあっては団委員長こそが経営的センスを持って率先垂範で組織的に団を引っ張っていかなければならず、いちばん汗をかいて背中を見せなければならない。「そんなハードな任務は無理であろうから汗の量が少なく榮譽あるポストに就いていただきたい！」という理屈で問題団委員長には降りて戴く。
15. 有能な人材でも県連盟や地区などの役務に時間を取られていると基本である自団への対応が疎かになる。団委員長に専念すべき役員が多いのではないかと？
16. 組織は団が中心であるにも関わらず、団経営実務教本がない。目的やコミュニケーションを如何に作るかが課題(大人同士、役割、パフォーマンス、チームワークなど)

ステップアップ100

17. 「ステップ・アップ100運動」を県コミや団担当コミの具体的な取り組み策として実施した。難しいとの意見が多かったが、真面目に取り組んだ団では成果が出ている。やはり議論より先ずは取り組むということが重要である。

財政

- 18.登録料、共済掛金、年間活動費等経費負担が多くなり退団するケースがある。活動場所も郊外が中心だと移動費がかさむ。以前は幽霊隊員もいたが共済運用により実人数での登録が必要となり、それが原因で人数が減ったことも現実。
- 19.県連盟の状況として、都会のある県とは異なり、財政的にかなり団が疲弊している。地元団を離れるRSの登録も今までは一時的に団が負担できていたが、団加盟員数減とともに賄えきれなくなり、「出費を抑えたい、お金は出したくない」という考えから、日本連盟登録料も抑える方策を検討するようになってきた。登録でも今までは申請していた「登録できる者」を申請しなくなり、加盟員数も減ってきている。
- 20.財政的に苦しくなる場合は「出費を抑えるのではなく、人を増やす方策を考える！」という考え方が必要である。登録料は組織の上納金である。加盟員は登録料に見合ったサービスの提供を受ける権利がある。一方で上部組織はサービス過剰の状態にあるのではないか？「日本連盟がなぜ必要か？ 団や隊の活動において日本連盟の存在意義は何か？ 無くなったらどんな影響が出るのか？ 隊のスカウト活動に影響はないか？まで考えておかなければならない事態に至ったと思う。そのシミュレーションをした上で、矢張り組織として必要と判断するなら登録料をきちっと払ってそのサービスを積極的に利用すべきと思う。

指導者

- 21.ともすると訓練課程の修了者は型に従うことを重視して応用が出来にくい。指導者の資質は資格より能力を重視することが大切。定型訓練の未修了者であっても、能力がある指導者を登用し、不足するスカウト活動の規範にかかわる部分についてはトレーナーがサポートし、県はマーケティングのサポートを行っている。
- 22.強制で無く自分に都合が良い時なら喜んで参加する人はいるはずである。これらの部分をBSでも整理して吸収したい。
- 23.指導者の高齢化を防ぐ対策はスカウトの保護者を獲得することが効果的で、特に女性指導者はネットワーク・フットワークが良い。

スカウトクラブ

- 24.自県連盟ではスカウトクラブは常に「団と一緒に」の活動を基本としている。団の保護者を対象とした1泊2日の「団のつどい」という行事をスカウトクラブ員が主導して開催している。あくまでスカウトクラブは団の支援役。日本連盟や県連盟はもっとスカウトクラブの設置を広めていただきたいスカウトクラブは団とは制約部分が違うのもっと広い気持ちでスカウト運動の支援役に徹するべきではないか。

意識改革

- 25.保護者は、ボーイスカウトが教育活動であることの意識が欠けていて、子どもを「ただ預けているだけ」思っているものと感じる時がある。BSは「教育」とは認知されていない。
- 26.指導者も保護者も、「意識改革」をしていく必要があるのではないか。
- 27.受験の際に経歴書で「BS経験者」であることを評価されないから誰も記入しない。自分の反省も込めてこれが実態。
- 28.自分の息子が就職先の会社について、「僕は、履歴書にボーイスカウト経験者と書いたので受かったのではないかと思う」と言っていた。何故ならば、面接での質問の殆どはボーイスカウトに関わることであったので。

B . 組織活性化策 2 . 地区活性化策

組織

1. 自県連盟では、現在県内1地区平均11コ団。大きい地区は18コ団で小さい地区は5コ団という状況。この差があると同一地区運営方式ではやっていけない。基調講演で宇野氏の言われる「29名以下の危篤団」が十数コ団もある。地区の適正団数規模とは何コ団なのか？現状地区役員数が1地区最低20名は存在する。
2. 県内20以上あった地区をマイナス7地区に再編した。加盟員減を懸念しての対策。地区の統合で実施後エリア拡大になり「会議が遠くなる、連絡も上手くいかない、役員の役割も減る」等々反発も多かった。地区の再編は、人間関係で持っている組織だけに非常に難しい。しかしやらなくてはならなかった。
3. あるブロックの県連盟は地区を無くしたいという希望がある。隊長+コミッショナー等、1人何役もしなくてはいけないので、団の活動に専念できないから。
4. もしも県連が無くなった？ボランティアの職員では仕事するのにも限度がある。同じように、地区が無いよりも在った方が良いのではないだろうか。
5. この運動は団が主体である。それには地区が活性化しなければ団は活性しない。県連盟はもっと権限を地区に委ねてスリム化すべきであり、それが、地区活性化につながるのではないか？
6. 地区再編を進めるべきであり、地区の特性を生かした地区づくりが重要。
7. 自県連盟では地区委員長で「企画財政委員会」を編成し意見を集約することで成果を挙げている。

加盟員

8. ある地区で退団の実態調査を行った。理事会開催の都度毎年の団審査報告を行って入団者より退団者が多い実態を示し、退団率20%の状況を超えたらどうなるかの危機感をあおった。（退団状況に改善を行うため実態調査でなぜ辞めたのかの追跡調査も行う）。実態調査を行った地区は一時期、退団率が増えたものの、その後は減少に転じ平成17年度は13%にまで回復した。

地区幹部の姿勢

9. 教育規定には団委員長の資格に「品性と～」と明確に記載されている。地区委員長など地区幹部も「おきて」をちゃんと実践しているのか？ 得て不得手はあろうが、適材適所で出来ないなら交代すべき。地区委員長は団の意見を集約して県連盟へ届けるのが重要な任務なのに理事会で発言が無いのはなぜか？ 言うべき意見を自分自身が持ち合わせていないのか、地区の意見を集約していないのかということになる。

団担当コミッショナー

10. 情報の共有化が出来る風通しの良い団を目標に、団担当コミッショナーを活用している。県連盟としては団担当コミッショナーの支援を行っている。

- 11.慢性的な人材不足により団担当コミッショナーが機能していない地区が大半である。そういう地区は、この制度が無い時代には地区委員長や組長委員長が協力して問題団への団訪問等の対応をしていたが、この制度を作ったがために「団担当コミッショナーの仕事！」として誰も何もやらないために地区としての対応が停滞してしまったところが多い。宙ぶらりんのままで時間だけが過ぎて行くという悪弊が実情ではないか？

支援組織構築

- 12.自地区（14コ団）では、スカウト7クラブとは別に「地区友好会」という組織を立ち上げた。会員数＝150名（各団で10名の会員を募ることにしている）。平成16年度設立。目的は「BSの目的に賛同する人＝商店、会社等の個人、に支援・協力をしていただく。年会費は1000円。会員証を発行し地区機関紙を配布、総会も開催している。

スカウト展に補助金

- 13.各地区実施のスカウト展に、県連盟が費用を補助している。

イベントプログラム

- 14.地区キャンポリーやラリーの位置付けを明確にするため、開催するプログラム等は、「団ではやれないことを地区がやる」「県連盟では地区がやれない内容を」として設定した。実施は定例化し毎回内容を変えて行うことを徹底した。

B . 組織活性化策 3 . 県連盟活性化策

組織

1. 自県連盟は、日連の組織改革に併せ6委員会を4委員会に再編した。地区にも今年から同様の体制を採らせた。今までは県連盟で総務委員会を開いても、内容を地区委員長から団委員長へ行くだけの上意下達的一方通行であったが、今は、各地区の総務委員が情報を集めて集約し、これを県連盟の委員長会同や常任理事会、理事会へと上部組織へ向かっての報告を行うようになった。
2. 地区統合を含め以下の改革を行った。 組織改革の推進役は県連盟本部と県コミッショナーが担当する
県連盟の4つに統合した運営委員会の委員は全て地区代表理事が就任し、4委員長には県連盟の学経理事が就任した。これらの処置により、地区、県連盟委員会、県連盟理事会が1本につながり、人員面や経費面のスリム化ができた。この4委員会ですべての問題を協議している。
 - ・以前は20以上の地区で6委員会ずつあったので支給交通費だけでも大変だった。4委員会になって地区委員長委員（6人前後）の協議で意見も集約でき、再検討もすぐに行えるようになった。
 - ・反対はあったし、他に知識や経験を有する人材も居たが敢えて断行した。平成18年度を「移行期間」と位置付けてスタートしたが、合言葉は「次回15N」開催までに1万人に増やそう！！」である。「増やそう」という意識で推進しないと絶対に増えていかない・・・。

3. 県連盟理事長が交代し、組織の再生を行っている。刷新には世代交代が必須であり、今が好機と捉えて努力中である。
4. 当県連盟では、理事会の構成を見直しして理事を15名削減した。反対は強かったが敢えて断行した。
5. 宇野先生の講演を聴くのは良い事であったが、聴くだけでは先へ進めない。今回の講演を聴き県連へ持ち帰ってどうするべきか？ どのような対策を講じるべきか？を真剣に検討したい。
6. 体質改善は長期のスパンで考え、対症療法で早めの解決を図る

運営

10. 自県連盟では、総会への出席は義務であるとして開催案内をしているが、必ず出席頂くからには単なる情報伝達会議ではなく、楽しんで出席頂けるように努力している。同じことがラウンドテーブルでもできるのではないかと、情報伝達はメールで、広報はHPで処理し出席者へはスキルアップや問題解決のために集まって欲しい。
11. 県連盟の具体的対応・地区の現状を地区代表理事らと共に把握して出来る事から解決に着手する。
12. 自県連や地区は、団に対するサービスが過剰である。団が求めてもいないことをこれでもか、これでもかと押し付けて来る。「必要なものを必要な時に必要なところに」提供することが肝要である。
13. 県連盟の具体的対応として、団・地区がしなければならない事と県連が支援できる事を明確に区分して重複しないように実行する。
14. 「県連盟・地区のスタッフは育っているか？」を検証しておくことが重要。その先に団があるので・・・。「団委員会、団会議を定期的開催しているか？」「団委員会、団会議で研修の時間を設けているか？」を必ず確認するようにしている。その確認結果を地区の組織委員が集約し、県の組織委員会が集約することによって各地区の状況を認識できるようになった。
15. 県連盟は足元を見て運営していく必要がある。理事会にしても地区代表理事と学経理事は立場が違い、「喧々諤々の討議」がなかなか出来ない。理事会が具体的な討議や検討の場になっていない場合が多い。
16. 日連、県連盟、地区、のサービス業務を再検証し、重複している業務をスリム化する。それで得たエネルギーを団に振り向け、「団に有為な人材を還す」ようにしている。
17. 言いつ放し、遣りっぱなしは絶対に駄目。イベント実施だけでも駄目。
18. 今の教育規定に問題があるなら、「規定を変えよう！そのことを日本連盟に上程しよう！」という県連盟や地区のアクションがあっても良いのではないかと。
19. BSは、決して広域な活動ではなく狭域の活動である。地域に開かれた活動であるということをBS側からもっと発信しなくてはならない。

県連盟幹部の姿勢

20. 県連盟内で正副団委員長の会合出席率がアップしつつある。組織の中では「トップは名誉職」と思われている。しかし、それは逆の話で、一番「汗をかく」必要があるのはトップであり、隊長がスカウトに「背中を見せる」と同様に理事長も「背中を見せる」ことが大事だと思う。又、もっとOBを活用すべき。
21. 県連盟役員は、自らの在籍団を立て直すことを最優先に取り組むべきである。在籍団の組織拡充が困難な状況であるならば、県連盟役務を辞めて団へ戻ることを第1義に考えて組織活性化に務めることとした。

22. 理事長の団が無くなったので、なるほどと思うと同時に役員こそしっかり自分の団を見なければならぬ。県連盟上層部の人の所属団こそが、運営にしろ教育にしろ加盟員数にしろ、きっちりと範を示すべきと強く感じた。改善するためには、「人を育てる」指導者をどのようにして育てていくのかを考えなくてはならないと、強く感じた。
23. 自分が動かずして人は動かす！
24. 県連盟幹部による地区訪問は、新理事長体制になったので積極的に組織拡充のためのトップ訪問行脚を実行している。理事長・事務局長・組織拡充委員長の3名で6地区中2地区を訪問し、具体的かつ突っ込んだ論議をしている。
25. 県連盟役員は自らの背中を見せるべきで、役員自らが自団の実績を上げるべきであり、「これからの時代は、自団の実績が悪い人が上部組織の役員に就くべきでは無い」という考え方が大切ではないか。
26. 県連盟理事長や事務局長が積極的に地区や団訪問を実行することで来なかった団委員長も顔を出すようになった。県連盟もサービス機関として「便宜を図る」ことを積極的に実行すべきである。
27. 会合に出てこない団委員長に対する残された解決策は県連盟トップによる説得であろう。一般企業でも最後は「トップビジネス」で解決を図るのが常道であり、トップが出馬してもダメならキッパリと諦めざるを得ない。県連盟の組織拡充委員会が努力してもダメなら県連盟トップの出馬を要請すべき。肝心なことは、「トップの出馬要請をしたか？」、換言すれば、「ベストを尽くしたか？」である。
28. 何をやっても出てこない団を引っ張り出すために、県連役員が地域団を訪問する。定期的に団委員長と県連役員の見聞交換をする場をつくる。 小さな県連(政府) 人材を団・地域に戻す。

財政窮乏

29. 急激な加盟員減少により、当連盟は財政破綻の状態になりつつあり、「無い袖は振れない」に状態になってきた。日本連盟は、各県連盟の財政状況を把握し分析しておく必要がある。
30. 自県連盟は、一般会計が数年前から赤字に転落し、改善できる見通しが立たない。今では、有給事務員に対する給与の無理な引き下げや遅配が続いている。
31. 一つの事務局が幾つかの小規模県連盟の事務局機能を負担する方式は考えられないだろうか？このままでは、財政破綻で県連盟機能を閉鎖せざるを得なくなる。
32. 当県連盟は、補助金額が多額にあるために現時点は財政的に困窮していないが、いつまでも継続できるとは思えない。そこで、会費収入でバランスするような支出規模にするべく、来年度から大幅な財政改革を断行する積もり。
33. 会費収入を少しでも補強するために、イベントのジャンパー等に入れるスポンサー企業を探したり、県連盟のホームページに、資金援助してくれる企業のバナーを貼り相互リンクさせたい。この場合役所も対象として考えられる。
34. 専門学校で文化祭でパンフの企業広告を1口3千円で学生が依頼して回ったら300万円集まったそうだ。県連作成の冊子等にも企業広告を載せたい。
35. 広告を依頼について、ボーイスカウトの知名度を向上しないとなかなか企業が魅力を感じない。
36. 県内のサッカー団体が企業を訪問して出資を募っている。1口20万円、オフィシャルスポンサー31万5千円。県内では、サッカー、バスケット、野球で同じ様な事をしていてそれを参考にしたそうである。活動するためには資金が必要であるのでボーイスカウトも同じ様な働きかけをしたい。応援してくれる企業にはメリットを与えたい。「我々はボーイスカウト活動を応援しています」とバナーをホームページに載せること等が考えられる。

講師活用

37. 団委員長会議等に他県連盟や日本連盟から講師を招き講演をしてもらおうと新鮮で参加者が耳を傾ける。
38. 所属県連盟で「団委員長の一人として」の立場で組織拡充委員に「団委員長研修会」で講演をお願いした。他県連盟から講師を招くと新鮮で聞いてもらえた。講師を変えるという方法は効果がある。

情報伝達

39. 県連からの情報を、確実に団まで届くようにすることが大切であるが、情報が末端まで伝わっていない。一般社会ではIT化が浸透し、「より早くより正確に！」は当たり前のことになっているのにボーイスカウトでは中高年の指導者の中にIT化に背を向ける人が多い。これからは、もっとIT化を進めなければならない。
40. 日本連盟からの組織拡充への働きかけが数箇所を中継して団まで届くと言葉も意味も形を変えていることが多い。県連盟も同様に情報伝達に時間がかかり、途中で消えてしまうことがある。正確な情報を素早く伝達することが肝要であり、世の中で普及しているメールやHP等の有効活用を加速するべきである。
41. 情報の流れが滞り、県連盟の情報が団まで届いていない現状であり、地区の統合や廃止も視野に入れて検討中である。人材と情報の流れをスムーズにしたい。また、地区を廃止した県連盟で組織拡充が実現できているところもあり、他県の情報も集めて検討を行うことにしている。

新規加盟員募集

42. これまでの減少は、実際の活動に参加していない架空の登録者を整理したことによるもので、現状が実数である。現状を出発点にして、組織拡充に取り組むこととした。また、これまで組織拡充は総務委員会の下部組織であったが、今後は独立して組織拡充に取り組む。
43. 県内のスカウトサイトマップを作成し、ボーイスカウト活動が空白地域の行政に対し新団設立を呼びかけている。
44. 加盟員の拡大施策は、既に15年前から提案されている内容である。やはり質と量は両方大事であり、質の向上も重要である。現場の隊活動でも安易なプログラム展開で質の追求をおろそかにすると減少につながる。子供たちに魅力ある活動の提供も重要であると考えている。
45. 県連盟コミッショナーの中には「数より質である！」と公言してはばからない人が多い。今の時代にあって呆れるばかりである。こういう指導者にも「数の重要性！」を認識させて何とか増員に励んでいきたい。

傷害共済制度と登録

46. 共済制度の発足に連動して、いわゆる幽霊会員の整理を余儀なくされたことによる減員が想像以上に存在するものと思う。

B . 組織活性化策 4 . 日本連盟活性化策

組織・運営

1. 「広義の日本連盟」は、加盟員全員を含まれるが、「狭義の日本連盟」は、理事、評議員、教育本部員などの「ボランティア集団」と、有給雇用者である常務理事以下の事務局員のいわゆる「プロ集団」で構成されているが、この両集団の「責任と権限」が極めて不明確であるように思う。公益法人の場合は、国の指導によりどこでも共通の責任体制がなければならない筈だが？ 組織拡充一つをとっても何の施策も決まらないし何も前進していない。「責任と権限」にメスを入れないで、「狭義の日本連盟」全体がいつまでも「小田原評定」を続けていると財政破綻を契機として好むと好まざるとに関わらず組織が崩壊するのではないかと危惧している。
2. 日本連盟理事会の委員会と教育本部の委員会、ボランティア委員とプロの事務局員の「責任と権限」「職務分担」を明文化した資料を見せて欲しいと頼んだら、「そのような資料は存在しない」と言われた。それらが明確化されていないということは、「責任がなければ、権限もない」「何をやっても良ければ、何をしなくとも良い」ということになる。
3. 常務理事・事務局長以下のプロの集団に「権限と責任」を集中させ、理事会・評議員会・教育本部は、その評価と決済をするだけの仕組みにすべき。
4. 宇野氏の基調講演を聞いて、「そうだったのか、なるほど!」と思う事が沢山あった一方、「このような話をする人が日本連盟組織に居るに何故現在のこのような事態になってしまったのか?」という不思議な気持ちになった。自分達も見つめ直さなければならないが組織的な体質改善が絶対必要。
5. 宇野先生の講演では「このままでいけば加盟員が10年後に更に半分になる」と言われる。23WSJ の招致活動も結構ではあるが、8年後には既に10万人を割ってしまっていることになる。日本ジャンボリーは加盟員増員効果に繋がらないことが過去のデータが示している。この辺を日本連盟はどのように分析判断しているのか？
6. 日本連盟に奉仕するボランティア指導者は、ボーイスカウトについてはそれなりの見識を持っているだろうが、財団の経営や組織の企画や財政の専門家ではない。ボーイスカウトについても知見が深いと言っても青少年教育の専門家ではない。そこを謙虚に判断して専門家に委ねる姿勢があっても良いのでは？

県連盟・地区・団との役割分担

7. 組織拡充における実際の役割りとしての「実行者」「支援者」「仕組制定者」「方針策定者」について、団・地区・県連盟・日本連盟の分担を明確化することと、認識を共有することが肝要である。次の通り例示する。

唯一団が「実行者」であり、県連や日連はその支援者である。

日本連盟は「仕組制定者」として教育規定や寄付行為というある意味での強制力を背景に、指導力や要請力を行使する。

団、県連盟、日本連盟は「方針策定者」。具体的に誰が当該組織の中の策定者であるのかを確認しておくことが重要。

上記の指導力や要請力の中身は、「実行者」である団のニーズに沿ったものでなければ団は従わない。又、方針策定者は団のニーズに合う内容で方針を策定しなければ実行が伴わない。

プロによる研究所設置

8. 教育規定の「基本方針」にある「一貫したプログラムに基づいて教育する」は、時代のニーズにマッチしていなければならない。このことについて「BS教育研究所」を新設して、有給専門家による継続的・専門的な研究を実施してその結果を団に還元して欲しい。(短期任期のボランティア委員や有給事務局員の限界)
9. 塾や部活を競争相手にするのではなく、共存する教育システムを開発する必要がある。この開発が、「中途退団抑止策」のキーマターになる。ボーイスカウト教育と青少年教育専門家で構成する常設かつ継続的組織による開発を提案する。現トレーナー群は、指導者養成のスキルホルダーであっても、「ボーイスカウト教育」や「青少年教育」の専門家ではない場合が多い。然もボランティアであることの限界をも考慮する必要あり。
10. アメリカのようにスカウト活動のステータスマネジメントがほしいが、この点については日本連盟に検討をお願いしたい。米国連盟の場合、BSへの入団に際して「あなたのご子をエスタブリッシュマン(立身出世 社会的成功者)にしませんか?」ということを確認しているらしい。日本の募集キャッチフレーズとは根本的に違うようだ。このことについてきちとした研究組織で検討して欲しい。
11. 14NJ組拡ブースでBP卿肖像画を展示した。「組織拡充の為にBP卿の創始された原点に戻ることが重要ではないか?」との議論があった。「変えてはならないことと、変えなければならないこと」について「運動としての共通認」が今こそ必要である。100年経過したボーイスカウト運動の中で変えなくてはならないこと、変えてはならないことが、何なのかについて真摯な検討が重要ではないか?

情報伝達

12. 今後は、日本連盟のスカウト運動推進委員会の内容を政策委員会が引き継ぎスピードアップが実現すると思うが、組織拡充には正確で迅速な情報伝達が欠かせない。また、団の活性化なくして組織拡充は実現が難しい。
13. 一般社会で常識とされているIT化が、この運動では非常に立ち遅れている。「情報のスピードと正確さの低コスト確保」は、今やIT化しか有り得ない。日本連盟は、全加盟員を視野に入れたITシステムの段階的構築について検討を始めて欲しい。一般社会では、IT化の浸透により最早ピラミッド型組織は崩壊しつつある。日本連盟 県連盟 地区 団のピラミッドは、近未来に別の形にしない限り、「情報のスピードと正確さの低コスト確保」は不可能。

以上

テーマ

「ボーイスカウト運動の危機的状況を憂いて、組織拡張・拡充のための提言」

【はじめに】

皆さん、こんにちは。

全国からお集まりいただき、しかも平日頃スカウト運動に一番のリーダーシップを取っておられる皆様に、この機会を得られたことに感謝を申し上げておきたいと思っております。

私は今日、前座でお話させていただきます内容と本論とを分けて準備をしてみました。すでに皆様のお手元に配られているのは、お話を受けてから早速日本連盟に差し上げた原稿ですが、その後何部か作ったものを用意しましたので順次お届けしたいと思います。

【私のボーイスカウト経歴について】

今私のボーイスカウトの経歴を配らせていただきましたが、裏側が一番新しい方でございます。私の人生はボーイスカウトとともに歩んできたという感じを常に持つておりますので、どんなことをボーイスカウトとしてやってきたかということ、皆様方にご理解いただくために差し上げております。

【「評論家ではどうしようもない 実践者でなければいけない」】

私は平成元年に日本連盟の中央審議会議員に引継ぎ張り出された途端に、組織拡張委員長を仰せつかりました。日本連盟の本部で特に責任を持たされたというのはその辺からですが、私はたぶん日本連盟関係者の中では一番厳しい率直な話をするということとで有名じゃないかと思っております。今日もそんなことで、私のボーイスカウト運動に対する情熱を皆様方にぶつけるつもりであります。日本連盟で一番厳しい、しかも率直な話をするということですが、私がやってきたことを申し上げるだけです。参考にしていただけないかと思っております。評論家ではどうしようもない。実践者でなければいけない。そんなことでお話をさせていただきます。

【ボーイスカウト運動との関わり】

「ボーイスカウトのような優れた組織、これに勝るものはない」

私は18歳で教員の養成、今の教育大の前身ですが、愛知で教員になろうということで第一歩を踏み出しました。と同時に学校教育だけではなく、地域の子供たちが皆よりよく育ってもらいたいということで、今でいう子供会（小学校1年生から高等科2年生まで）を結成しました。

毎日曜日にプログラムを展開している中で、子供たちが受け身であるということに気づきました。受け身になって、こちらがプログラムを用意するという感じ。「お客さんじゃどうしようもない」といろいろ苦勞をしていた時に、ボーイスカウトの指導者講習会がありました。

当時は宿泊で5日間くらいの日程でした。講習に出て、「こんな素晴らしい組織が世界にあったのか、日本でもボーイスカウト運動を取り上げてもらえたら」と思い、と同時に「これだ！」と感じました。ボーイスカウトのような優れた組織、これに勝るものはない。子供会

をそこに持って行く。昭和24年のことです。私には20歳でした。20歳で隊長はできないので、1歳年をこまかして隊長をやりました。

まったく全てを自分が立ち上げました。当時は豊田市ではなく西加茂郡の一町村ですから西加茂第1隊というのが私の最初の出発でした。ところが一握りではどうしようもない。いくらがんばっても世間は知らない。活動していても名前を聞いても「男の子のスカウトか」というようなことで相手にもされない。やはり人を育てるには多くの人々の参加を得て運動に持っていかないと自分が努力しても成果は発揮できないということで、一時、中学校の教員になって生徒指導を仰せつかりましたので、通学団をボーイスカウトの組織そのものにしてやるうということでもパトロールシステムを学校中に設けました。

集会等はそれぞれの地域あるいは学校の授業が終わってから持ち、ボーイスカウト流の組織を波及させたわけです。非常に効果がありました。班長、次長とかの役職は名札に傍線を引っぱってボーイスカウトと類するような方向でやりました。

中学3年生を筆頭として、リーダーシップを取れば結構うまく地域で活動をしてくれるという実感をえました。中学校の中で通学団として活動しましたが、日々の善行と地域への貢献ということで方向付けたのが、非常に成果がありました。

これは学校教育の中ではボーイスカウトの組織づくりを日本連盟に登録して云々ということとは出来ないで、またリーダーもそれだけ居ないこともあって、当時、地域のライオンズの方たちに働きかけボーイスカウトの良さを知っていただけるように懸命に努力いたしました。

するとライオンズクラブの方たちが立ち上がって教育委員会を動かし豊田市少年団を作りました（これは私の意図に反しておりましたが）。小学校5年生の中の優秀な子供を全市から70人選抜き活動しました。河川敷で冬でもキャンプをやりました。グリーンバー訓練、いわゆる班長訓練を70人に行いました。

その結果、子供たちが非常に成長してくれて良かったのですが、官製少年団じゃ困るという声がマスコミから出たため、ボーイスカウトに切り替えることになった訳です。

それにはリーダーを養成しなければなりません。青年団あるいは学校の先生に働きかけて指導者講習をしました。「1年後には一挙にボーイスカウトを設立するぞ」という気概をもって新米のリーダーを中心に30個団作りしました。

70人全員が地域で班長、次長になって仲間を入れたプログラムを推進してくれました。これが41年前です。当初、私は「半分は消えるだろう」と予測はしていました。しかし、未だにそれを続けているリーダーも居るのです。私が教えたそれぞれのリーダーが今はコミッショナー、スタッフになってボーイスカウト運動を支えています。

こういったことを振り返ってみますと地域に団が少ないとか、大きな中学校区にボーイスカウトの組織が無いという状態では浸透していきません。

ですからお金のかからないボーイスカウトを……、ということ、ネットカチーフ1本で立ち上げた訳です。問題は外側の格好ではないのです。中身（プログラム）です。集まってきた子供たちが意欲をもって出てくる。そして満足してうちに帰っていく。このことが多くの人の共感と呼ぶのであって、格好だけボーイスカウトのユニフォームを着ただけではないものじゃない。当時はそういうことを強く感じました。これが今の豊田地区の出発点です。

【 県連盟としての取り組み 全国1番を目指す

「リーダーの数じゃない。登録人数はスカウトだ」

私は愛知連盟で、38歳から35年間くらい理事をやっていました。後半は国際交流委員長やれ、出版委員長やれとかいう形になってきましたが、昭和61年に組織拡張委員長を仰せつかりました。

当時はスカウト登録数が、東京、大阪、愛知という順番でした。「愛知は3番目じゃいかん。一番にならなきゃならんじゃないか」という気持ちを強く持ちました。スカウトの人数が減るのは当たり前だと皆さん思っておられる訳です。大県連（東京、大阪、愛知）は特に「沈む一方じゃないか」ということを皆さんが言っておられる。

私は愛知で「なに、くそ！ 教育愛知でがんばろう」ということで、23地区の組織拡張委員長を集めて第一声をやりました。ところが何と情けないことに、各地区から出てきた組織拡張委員長は登録事務だけやっている。「登録だけだから」「一番楽な委員長だからやってくれ」と言われたと。これが当時の組拡委員長です。「スカウトの人数が減っていくのになんか考えているのか。増やさなきゃならないじゃないか」ということで、それができない人は代われということで、それこそ毎月組拡会議をやっていました。

ノルマを与えて、それぞれが増やす途を考えて提案し、そしてその提案に基づいて努力する。努力した成果を次の委員会に出て報告するというのをやりましたら、私の顔が見られないという委員長もおりました。

そのうちに地区のコミッシヨナーも全然協力が無いとか、あるいは地区協議会長や地区委員長も駄目だという話が組拡委員長から返ってきましたので、県連主催で合同会議を開いて「それぞれが努力せよ」という形でのいわばハツパをかけたのです。

その成果が「歩留り」。いわゆる減っていく率が少なくなった。大きく減ったのがどんどん少なくなった。それで大阪、東京がどんどん落ちてきて、私が委員長になってすぐ大阪を抜いて2位になりました。

大阪を抜いたというのは、減る率が少なかったからで、増えた訳じゃないです。

この分だったら東京に追いつくぞと。東京はリーダーばかり多いけれども、問題はスカウトなのです。

ボーイスカウト運動というのはスカウトのための運動であって子供が大勢にならなきゃどうしようもない。私は当時から子供の数で皆に督励いたしました。リーダーの数じゃない。登録人数はスカウトだと。スカウトが増えなきゃ、しかも底辺が増えなきゃ。ピーバー、クラブが増えなきゃ団は維持できないし、大勢の人たちに評価を得られないということで懸命に努力いたしました。

【 日本連盟における、私の取り組み 】

県連盟でがんばっていたら日本連盟に引つ張り出されて、平成元年から組織拡張委員長にさせられました。東も西もわからない。しかも任意団体の日本連盟と財団法人の二本立ての怪物みたいな組織です。私も行政を担っておりましたが、行政よりひどい、これじゃいい組織に絶対ならないと思いました。

亡くなられました総長が「10年も改革のために委員会をやっていても少しも進まない」「と私に嘆いておられました。その後私も副議長を仰せつかり「半年、1年で改革しましょう」

というわけで強行に持っていき、日本連盟の方向付けをいたしました。

やる気になればできます。47の都道府県から集まってみんなの意見を聞かなければならない、それじゃ一歩も進まない。東京とそれぞれの地域とは違います。それぞれのリーダーの考えも違いますし、子供たちも違います。ですからそれを一律に聞いていたらそれこそ一年が過ぎてしまいます。サロンで終わってしまいます。サロンでは駄目です。

せっかく皆さん方、来られた限りにおいては「よし、やるぞ」という気持ちをもってお帰りいただかなければ、単なる分科会やって、サロンやっていては駄目です。

日本連盟はそれが多すぎた。役を仰せつかる出席率がいいが内容が進まない。これじゃ任期が来て降りて、次の人がきて全く同じことをやっている。こういう組織は発展するはずがないし、どんどん低下してしまうことを私は日本連盟に出て一番危機感を持ちました。これが上部組織だとすると日本連盟は当てにならないと、もう県連自分たちでやらざるを得ないと…。

【日本連盟組織拡張委員長として 各県連盟を訪問して

「理事長にすぐ降りてもらいました」】

日本連盟の組織拡張委員長になっていろいろ会議をやりますと、委員の中でも「ああだ、こうだ」と意見が分かれます。ですから自分たちでいいと思うことをがんばってやることにし、それには地域の実態を知らないといけないということで、それぞれの県連の総会にも出していただきましたし、組織拡張の関係者の集まりにも進んで出ました。

1年間に20県連以上もまわりました。回ってみて、やはり日本連盟と同じような県連盟が沢山ある。

ある県連に行きますと、理事長さんの団が架空なのです。びっくりしました。お金を出して、架空の、最低のボーイの人数だけ出して登録している。他の理事に聞いてみると、皆知っている。

そういうことが判って、私が一番率直に申し上げたのは、まずこの県連をよくするには「理事長さん、下がってください」と…。理事長にすぐ降りてもらいました。

役員には「理事の関係する団が良い組織でないと号令かからない」「後ろ姿で導くなんてことは到底おぼつかないし、口がうまいだけで自分の団は危ないじゃないか」と…これじゃリーダーとは言えないです。

私は組織拡張のことで半分くらいの県連を回りました。私の感触では長野県、愛媛県というのはしっかり固まっているという実感がありました。実績も上げていましたし、やはり今日でもがんばっています。そういう実態がわかりました。

そうかと思うと、先ほど申し上げたように、理事や理事長の団がほとんど架空で、中にはコミッションの団もつぶれかかっている、これじゃどうしようもないです。そういうことを具体的に訴えるために日本連盟の登録で全部役員を調べてデータを持っておじやました。「お宅の関係の団は危篤団ですよ」「と…。」「これじゃ理事は務まりませんよ」「と…。」「まず自分の団をしっかり活性化すべきじゃないですか」ということで、いつもお土産をもっておじやまさせていただきます。

今日ここにたくさんの方の県連の方がおいですが、当時をご承知の方もいらっしゃると思います。

そういう中で感じたことはまず役員が範を示さなければこのボーイスカウトは成り立たない…。各隊でいえば、隊長が優れていればスカウティング万々歳です。子供たちもよく育っていきます。

団委員長も同様です。自分の関係団が盛大であったら、皆、号令もかかります。「自分の団なんだ」と言えるでしょうし、言えないというのは自分に弱みがあるからで、それではリーダーシップを取れません。

ボーイスカウトは言い放し、やり放しで年間過ごせる。データだけはしっかり出してあります。資料だけは出していますが、中身は結構出来ていない。これが「ボランティアだよ」では、どんどん落ちるだけ。

そういう中で私も組織拡張委員長になりまして、まず日本全体よりも愛知で頑張らなければいけないと、愛知連盟が「歩留り」して増えれば私の言うことを聞いてくれるんじゃないか、ということでしたががんばりました。そして増やした頃には東京連盟に追いつきました。スカウトの数では東京連盟を抜いて一番になった。

データを見ると10年間は東京よりもナンバー1でした。最近またちょっと手をゆるめたせいか、ちょっと下がってきている。これは関係者に火をつけてそしてノルマを課してがんばってもらおう。それしかないのです。

【 所属地区における自団の取り組み 「調整区域で40年、標準団で続かれています」 】
少子化が進んだ、学校の部活動や塾通いが多くなった、こんなのは関係ないです。

例えば私の団のことを申し上げますと、私は41年前に少年団を解散させてボーイスカウトを設立しましたが、私の地域は希望者が多くて、3コ団作らないと収容できないということで、3コ団を作りました。

抽選で1団、2団、3団と決めて私は2団になりました。ということで、そもそも私が団委員長を務めています今の団です。そういう組織を作ってみて、すぐつぶれるなと思っていたら3団がやっぱりつぶれて、そのうち1団もつぶしてしまっただけ。

カブを増やせと言っていたのだが、上の方ばかりやっているものだからとうとうつぶしてしまっただけ。それで私のところのローバーを差し向けてローバープログラムとして1団を復活させました。

結構ローバーだけでやれるのです。私は20歳代で少年団を立ち上げた。ローバーの年代だったから結構能力を持っている。1人じゃできないけれども、何人かがんばればできるはず。そういうことを知っていましたからすぐに「ローバーで立ち上げよう。側面から応援するぞ」ということで1団を復活させました。

今、私の団は調整区域です。人口が増えないのです。それで40年続いています。標準団で続かれています。それでしかも今申し上げた1団がつぶれた。それを復活させた。だから皆がその気になってやれば、これだけいい組織ですから、そして理念も良い訳ですから、増えて当たり前。

これが増えないというのは頭に立っているリーダーが駄目だと…これが私の結論です。そういう考え方で皆さんにも訴えて今日までできたつもりです。

【 所属地区における自団の取り組み 「後継者をきちつと育てる体制」 】
今配らせていただいているのは愛知連盟の私が立ち上げた豊田地区の登録人数です。豊田1団も復活がなされてきております。人数はまだまだ少なく、27人です。

私は2団ですが、76名です。本当は90名、100名になれば良いのですが、それこそ調整区域で人口が増えないのです。人口の増えないところで懸命にがんばるということを、私は豊田2団で実践しております。

とすれば文句なんか言つ暇があつたら皆さんの県連、地区の登録人数を1人でも増やしてください。実践で数が増えなければ人づくりの運動は成果ができません。

一握りの優秀な子どもを作つても駄目です。いい組織には決してならない。

皆が評価してくれるのは参加した子どもたちがすすくと伸びて、リーダーシップを取つて、その中から隊長、指導者がどんどん出て、そして後輩の指導をして、これがスタイルです。

私の団のリーダーは少ないですけども、皆「スカウト上がり」です。登録していない仲間はいっぱいいます。でも、いざイベントをやるうとうと皆集まってきました。号令がかかると過去のボーイスカウトが集まってくる。ということで豊田2団の偽らざる登録数です。

豊田市といっても山間部もありますし、調整区域もあります。私の仕事場は千葉ですが、団委員長の名前だけ置いています。名前だけですがこういういい状態を作っておいてくれます。しかもその中で3人が副コミッショナーで、地区にも出てがんばって居てくれる。地区に出る限りにおいては、後継者をきちつと育てる体制でないと駄目だということをやっている訳です。

【 所属地区における自団の取り組み

「地域のリーダーとして位置付けられなければ駄目」】

総計を見ていただきますと、ほとんどの地区が減っている。豊田地区は112名増えているのです。最盛期よりは減りましたが、今、皆その気になってきたので増えてきています。「私の面子にかけても豊田は減らしません」といってコミッショナーはじめがなばっていますが、運動というものはそういうものではないですか？

下の層がどんどん広がっていったって、初めて人づくりの優れたボーイスカウトの運動に発展する訳です。子どもたちは仲間を集めてくる。仲間と一緒にイベントをやる。そしていじめなんて問題じゃない。皆仲良く学校へ行けば、学校でリーダーシップを取って成長してくれる。これが一般の評価です。

しかも私の団でいいますと、自分の団のリーダーだけではいけません。地域の人たちから信頼されて、地域のリーダーとして位置付けられなければ駄目です。だからPTAの会長をやり、コミュニティの役員をやっております。地域でリーダーシップが取れる。そして人間関係がたくさんできてくる。少子化の中でも参加者を引っ張ってくれる。こういういい状態が今日あるということです。

豊田地区全体がなれば、これはいい運動だというように評価されてくるのです。補助金が出る。ライオンズ、ロータリーも応援してくれる。地域の人たちも参画してくれる。そしてそれがすぐ子ども会活動にもいい影響を及ぼしている。こういうことをいくら言葉で言ってもしょうがないので、私たちの地区の実態を披露させていただきました。

【 地区組織として、「体質改善の決め手は地区」 】

この「x印」危篤団」を無くそう。「逆三角形印」要入院、三角形印」要治療団」をせめてにしよう。 に近づいたら にしよう。 こういうチェック体制を整えて、地区の役員はまず自分の関係団を活性化しなければならぬ。 範を示せと…。それができないのならやめなさい。 もっとがんばる若手を出せということになってしまっています。

今日お集まりの皆さんは自分の関係団がどうであるかチェックしてください。そしてその辺から体質改善を図っていかねければならぬでしょう。そして決め手は地区だと思っています。地区委員会の組織が鍵です。

ボーイスカウトの発展の鍵は地区だと思っています。地区をチェックして活性化していかねば団は活性化していきません。 県連や日本連盟を当てにしては駄目です。 情報はどんな提供してもらってください。 利用はしてください。

利用することはあっても日本連盟や県連が手を差し伸べてくれるなんて、そんな甘いものじゃないです。 なぜかという、ボーイスカウト組織はほとんどボランティアでしょう。ほとんど皆ボランティアでがんばっているわけですから、自分の仕事以外にというと、やはり上部組織といえども、「どれだけ各県連の末端までサービスが出来るか？」ということと出来ません。いくら逆立ちしてもできないのです。

ですが、組織を拡大していかねばならない。 組織を拡大するためには今日お集まりの皆さん方がんばっていただくしか、道は無いと思います。 そんなことで前座を終わります。本論に入っていきます。

【 組織拡張・拡充における提言 「要（かなめ）は地区組織」 】

今申し上げた運動の要は、地区組織であると思います。 ですから、地区組織が、これこそ第三者評価をする必要があるのではないか。ここに思いつくものを掲げましたが、これは一つの提案です。

もっとこれが抜けているとか、あれが必要だというものがありません。皆様に足していただきたいと思えます。「おまえの団は駄目だ」、「おまえの地区の役員はどうしようもない」といった非難や中傷ではなく、現状を少しでも前に進めるための評価項目だという考えに基づいて書いたものです。

よく努力しているのか、努力不足か、出来ていないのか、こういうことが一つのチェックになるのではないかと思つたので、皆様方に提案させていただきました。是非考えていただければと思います。

言い放し、やり放しでは駄目です。 行事屋では駄目です。 本当の組織として稼動するためにはこういう内容がしっかりうまく行っている状態に、努力している状態に持つていかねばならないということの「例」として用意をさせていただきました。

【 組織拡張・拡充における提言 「中学校区を狙って団を作る必要がある」 】

次に同じようなことですが、団運営の評価をやっていただきたい。ボーイスカウトの運動の基盤というのは、単位「団」です。単位「団」が背負っているわけです。

単位「団」が最前線で人づくり運動をしつかりやって地域から評価されているという、しかもスカウト数が減らないという状態に持つて行くためには、団委員長さんの姿勢、あるい

は団の内容をつぶさにチェックする必要があるのではないかと思います。

これは地区組織の方々がチェックすればよいと思います。チェック項目が14項目出ておりますが、私見で作ったものですから参考にしていただければと思います。

ついでにもう1枚お配りしますが、ボーイスカウト運動の発展というのは、今の団をつぶさないようにするというだけでは消極的です。

日本連盟の統計資料を見ても、以前は新しい団がどんどん出来た時代がありました。今は無いでしょうか？ 復活団は時々あっても、新団の設立はなかなか無い。ということは新しい団を作ることが前提です。

つぶさない、減らさないというのは消極的な対策です。やはりいい組織であれば、「まだあの中学校にはボーイスカウト組織が無い」とすれば、中学校区を狙って時間をかけてでも関係者の理解を得て団を作る必要があるじゃないか？ そんなことで新設の団の手順を掲げています。

要は新しい団を毎年作っていかなければならない。そうしなければ現状を打開できません。一人減らさないようにという消極的なことを言っているのは、皆の気持ちが弱まっていくだけです。

新天地を開拓するという一つの目標をなぜ地区で持たないのか。

私は千葉に来てずっと回りを見ていて一つの市で1個団しかないところがある。その団の委員長は、回りの町村からスカウトが集まってきて人数が増えると断っている。

あるいはライオンズが応援してくれているのに、ライオンズの清掃活動に参加の要請があっても自分の方のプログラムを優先し参加させない。こんな委員長をおいたらどうしようもない。評価されるわけがない。何故もっと層を広げていけないのか。

要するに子どもたちのために、あるいは地域の人たちが皆幸せになれるように、そのためのボーイスカウトであるという感覚が無いのです。

後生大事に自分の団が維持できる人数だけ集まればいい、「余分な苦労なんかしなくていいからはじいちゃえ」というような団の委員長の姿勢が在る限り駄目でしょう。

しかも毎回の隊のプログラムを団委員長のところに持って行って決裁を貰わないとやれない。総会のときに1年間のプログラムで貰ったら、隊長の責任でやったらいいじゃないですか。それを毎回出て行って決裁をもらう。もしも事故があったら団委員長の責任になるから持って来いという。

これではお役所仕事です。こんなことが現実にある。ボーイスカウトは一つの大きな人づくりの運動であり、それはボーイスカウトだけの運動ではなく、仲間も含めた人づくり運動であるということを変更して皆が見直さなければならぬ。

【 組織拡張・拡充における提言 「落ちコボレは、絶対作りませんでした」 】

しかも今、学校教育は駄目でしょう？ 私も学校教育の現場にいましたが、私は教員らしからぬ教員をやりました。でも「落ちコボレ」は絶対作りませんでした。一人学校へ来なければ授業を自習にしても迎えに行きました。絶対に「落ちコボレ」を作ったら教育は失敗だと思っています。

優等生がいたって、「落ちコボレ」ができたら駄目だ。義務教育として皆幸せにならなくちゃいけない。平等っていつのはそういうことじゃないですか。

優等生を作った、部活動で1番になったといつてそれを誇らしげにしているよりも、「落ちコボレ」を1人でも少なくすることの方が大事です。学校をあきらめて塾通いになっている訳でしょう。だからこのボーイスカウトの精神、素晴らしい組織を関係者が浸透していかなければなりません。

【 組織拡張・拡充における提言 ボーイスカウト運動の基本理念とは

「現代社会のニーズに答え得るような内容じゃない」】

この冬、千葉県連盟の団委員長研修会が初めて開催されました。十数年千葉にいても「ボーイスカウトの制服の姿を見たことが無い」という話をちょっとさせていただきました。

聞いてみると親が家から子どもを集会場所まで連れて往復している。これじゃ世間に見えませんか。

ベンチャーはどうかというと、私服で自転車に乗って行って、集会でユニフォームに着替えて、終わると私服で帰っていく。これじゃ折角のいいPRの機会を逃してしまふ。

私は一事が万事、今のボーイスカウトのやり方というものは、現代社会のニーズに答え得るような内容じゃないと思います。理念さえ間違わなければ、そのリーダーなり地域の実態でどんどんやっていけばいいじゃないか。

プログラム委員会から新しい案を出してもらわないと出来ないような能力のないリーダーではどうしようもない。理念さえ間違わなければ何をやってもいいじゃないか。それが私の考えです。

それで成果が出なければどうしようもない。スカウトが喜んで集会に出て進級して、成長していく。その姿を世間の人に見せていくことが大事です。

私のところでは、年末にいつも50キロのオーバーナイトをピーバーからやっています。山を越えてといって50キロを歩かせていますが、リーダーの付いていないスカウトが夜中に補導されたことで、オーバーナイトは辞めた方がいいのではという意見が県連からありました。

30年来毎年続けているプログラムを1つの団の不手際で県下一斉に止めようなんてそんな権限があるのでしょうか？

何故ならば、各団の委員長が責任を負ってやっていることです。リーダーが責任を持っているプログラムにいちいち、いいことならともかくマイナスの発言をしてもらっては困るということです。

何か事故が無い様になつてくると、ボーイスカウトも結局は、まるつきり子供会と一緒にです。子ども会と同じような姿では、他のスポーツ少年団の方へどんどん行ってしまいます。もっとボーイスカウトらしい逞しき、普段やれないようなプログラムをどんどんこなして、そして成長していく姿がボーイスカウトの良さだと思います。

ただ整備されたキャンプ場へ行ってキャンプのまねごとをやっているだけじゃ…、これは子供会と一緒にです。もっと能力を発揮できるようなプログラムがいくらでもある。そういうものを我々がやって魅力のある方向を出していかなければならない。体質改善をしなければいけないのです。

【組織拡張・拡充における提言 体質改善と対症療法】

「このままでいくと10年経つとまた半分に減ります」

「人数はたくさんいるのに、登録をみると菊スカウトがない」】

皆さん、体質改善をしていますか。体質改善というのは長丁場でやっていかなければならない。今日、明日にできるわけではない。

もう一つは対症療法。今、子どもが集まらない、つぶれるというこの危篤団をどうするか？ なんとかしても救わなければならないという考えが当然出てこなければならぬ。そしてあわよくば新団を設立するという方向がないとボーイスカウト運動というのは尻つぼみです。

昭和58年を基準とすると、スカウト人口は半分に減りました。このままでいくと10年経つとまた半分に減ります。このままの関係者の姿だったら、そして「自分の生活は困らないからいいや」という日和見的な人が集まっていたら、そんな組織ならどんどん減るだろうと私は危機感を持っております。心配しています。これが現状です。

私が組織拡張委員長で出た時に「日本連盟はこのままでは駄目になってしまおう」と思っていました。思ったとおりになってきました。皆でもっと改革をいかなければならない。

例えば進級もできていない、技能章も取れていない。それこそ菊にも上がらない。先ほど申し上げた団なんかは、菊スカウトが1人も出ていない。人数はたくさんいるのに、登録をみると菊スカウトがない。それで安全第一だという方向ですから、魅力は無いでしょう。

ただユニフォームを着てプログラムに参加している、内申書に書いてもらえばいいという発想では駄目です。もっと勇気をもって体質を改善するとともにやはり対症療法、一番危ないところを救わなければならない。それにはどうしたらよいか？

【組織拡張・拡充における提言 OBの人材を活用すべき】

今、OBの方が結構たくさんいらっしゃいます。何故OBを使わない？ と私は思います。ただの「なかよしクラブ」じゃもったいない。来賓として行事に招くだけではどうしようもないです。

本当に理解してくれて活躍した人はしっかりと掴まなければならない。

例えば先ほど申し上げました、新団を作るプログラムはOBにぶつけてもいいじゃないですか。地域に人脈もたくさんあるでしょうし、OBの人たち何人かに中学校区にボーイスカウト団を是非作って欲しいと、現役のリーダーも応援しますとそういう方向を何故出せないだろうか？

私はこの18日に、豊田地区のBP祭で講演をせよと言われていたので、OBが集まるようにしました。OBが一番ボーイスカウトのことが判っている。その人たちになぜ活動してもらわないのか？ 社長もいるし、定年退職者もいる。その人たちの能力を何故活用しないのか？ 18日にはそれを提案するつもりです。

「死して後までスカウトを」と謳ってもしようがない。生きている時が勝負ですから。生きていく時にどれだけ努力して、人づくりに成果を上げたか、これじゃないですか。死んでから石塔にボーイスカウトの印を付けてもしょうがない。生きていく時が大事です。

【 組織拡張・拡充における提言 記録を残し伝える 】
 それでやるならば是非記録を残してください。ここに記録を持ってきました。私が今日まで毎年続けてきた原稿、あるいは長野でお話させていただいた資料など、いろいろ綴じ込んだものです。

私が死んでもその精神なりがいろいろ役立つだろうということと用意してあります。今日の資料もこの中に綴じるわけですが、私が死んだときに少しでも気持ち伝わっていくのではないかと思います。

【 組織拡張・拡充における提言 努力することとノルマ

「努力していれば成果が出てくる。能力がなければ出てこない」】

今日は組織拡張委員長さんがたくさんお見えですが、本当に組織拡張のために懸命に努力しましたか？

口幅つたいことを言うようですが、努力していないのではないですか？ 努力していれば歩留まりはあるでしょうし、増えます。それが増えないということは今日お集まりの方々ががんばっていないと。あるいはもっとひどいことを言うとな力が無いと。

努力していれば成果が出てくる。能力がなければ出てこない。

「努力しています、努力しています」「会議をもっています」「5ヵ年計画を立てています」と言っても「絵に描いたばたもち」ではどうしようがない。問題は気がついた人が自分の役割を完全に果たすためにどれだけの努力をするのか？ これによって多くの人たちが動いてくれるのではないですか？

例えば、私がこうやって蓄積してきたことで、皆さん方が影響を受けて少しでも役立つようなものになって行く事を期待している訳です。

ですから記録は是非取ってください。私は講演会へ出て行くときは必ず資料を用意していきます。ということは言葉というのは、消えてしまふということですよ。

それに受け止める人も50人いたら50人通りですから伝わらない。だから、地区の体質改善、県連の体質改善、委員会の体質改善そしてチェックするということをやらないと。「やってください」と言っただけで「はい、わかりました」では何も判っていない。結果が出ていない。だから悪く言えばノルマを与えなければならぬ。

どうして欲しいのか、「この団はつぶれかかっているけれど、絶対つぶしてはならないよ。そのための体制を整えよ」。これはノルマです。やはり情報組織というものはそういうもので攻めていかないと、言葉で「統計資料ではこうですよ。危篤団が何個団ありますよ」「だけじゃ済まされないのです。

真剣になれば必ず伝わります。可能性を信じてがんばれば出来ます。1人じゃどうしようもない。もっと動かし上手にならないと。大勢の人たちに火を付けて皆で動いてもらう、自分を含めて。そういう考え方であれば必ず成果は表れます。チームプレイが大切です。

【 組織拡張・拡充における提言 マンネリ化の排除 】

それから優れた組織というものは必ず発展をするものです。マンネリは駄目です。マンネリ化、組織にあぐらをかいていたらどんどん衰退します。

昔のスカウティングの資料だけで今の子どもたちを導こうと思っても駄目です。

実修所や研修所に行ったからいいという問題ではないです。あれは一つのきっかけであり、あとは自分の応用です。

だからマンネリは駄目。企業でいうと不二家がいい例です。

日本連盟、県、地区、団、それぞれが理念をしっかりと持っていけば方法は考えられます。

「10年変わらずやっている」これは後退です。「今年もこのプログラムをやるよ、あのプログラムやるよ」とキャンプをやっていればいいかというところじゃない。キャンプを去年よりもっといい刺激的なプログラムにする、感激してくれるようなプログラムに持っていくというものが無いと駄目です。

同じスタイルで先年度やって成果があったから、これでやればいいとそういう問題じゃないと思います。だからマンネリは駄目です。皆さん方が地区、県連しっかりと内容を見ていただいてどうしたらいいか、これは是非評価チェックをしていただきたいと思います。

【 組織拡張・拡充における提言 「サロンでは駄目。なかよしクラブでは駄目」 】
それから次は、会議の体質です。この会議については、日本連盟も県連盟もそうですが、主催をする側はたき台を用意しなければならぬ。

「皆で集まって意見を言いますよ」「これは駄目。」

主催をする立場の人は、今日は何を訴えるのか、どういつぶつに方向付けたいのか、必ずたき台を用意している。100パーセントいいものじゃなくていいのです。たき台を用意して、皆で相談して、もっといいものにして、そして実践していこうという、そういう会議を是非していただきたい。

ただ理事会があつて原案が示されて「もっとも」で終わっているのでは、マンネリです。

「去年と同じか」というのではどうしようもない。今年は地区ラリーをやるとか、どういふ点で違ったものをやるのか？そこです。そのための会議ですから、主催する側が必ずたき台を用意して、そのたき台を基に皆さんで協議してよりよい結論を導いていく、こういう会議を是非やっていただきたい。

サロンでは駄目。なかよしクラブの一体化組織では駄目です。そんなことをやっている現状ではありません。

スカウト運動というのは危機です。このままどんどん減っていけば日本連盟も維持できなくなります。「登録費を上げる」。もっと減ってしまうでしょう。だからこの辺で是非会議の体質を変えてほしいと思います。

【 組織拡張・拡充における提言 「ベンチャーの姿を見て後輩があこがれる」 】

先ほど申し上げましたが、まず役員は関係の団を標準団に持つていくこと、長年やってもベンチャー、ローバーができていないという団がありますが、これは大きな運営上のミスです。ベンチャーがない、しかも地区のベンチャーも作っていない、ボーイでおしまい。これじゃ運動の成果は出ていません。ローバーが多くても駄目です。

私は自分の団を運営して感じることは、ベンチャーが一番の目安です。ベンチャーの姿を見て後輩があこがれてベンチャーになろうと、こういふふうを持っていかねばいけない。

ローバーもリーダーですから、スカウトの「あこがれの姿」というのはベンチャー「ではないのでしょうか」「隼、富士。格好いいな」そこへ持っていかないと。それも育てられない

ような団運営というのは体質が悪いです。

例えば1つの例を言いますと、私の団は、団行事はベンチャーに全部任せています。ベンチャーは、部活をやったり、塾通いをしたりしていますが、全部任してやると皆仲間が寝袋を持って集まってきて、スカウトハウスで夜会議をやってプログラムを考えて、役割を決めて、そして朝帰っていく。ベンチャーの姿がボーイのあがれの姿じゃないといけないと思います。

だからベンチャーが歌の指導をやったり、タクト振ったりやっている。今の子どもたちは最初あまり声が出ないものですが、何回もハーサルをやって自信をもたせてからプログラムを進めていく。そうすると「やったー」という満足感で、「よし、次のプログラムもやるぞ」ということになっていく。ベンチャーだったら夜遅く集まってもいいわけでしょう。夜遅く集まってきてプログラムを練って分担をして、そして帰って部活に行ったり、学校に行ったり…。

ベンチャーくらいになるとこれができる。だから是非ベンチャーを育てて欲しい。ベンチャーに機会を与えて欲しい。先ほど私が申し上げたように、新団を作るのにローバーのプログラムにしたら成功した、これと一緒にです。団の行事はベンチャーでやればいい。ベンチャーがそれだけがんばったら、どんどん進級させてあげればいいじゃないですか。

【 「能力の無い子でも努力すれば進級が出来る」 】
 肝心な精神が駄目だという訳じゃなくて、本当に前向きによくがんばったらそれだけ評価してあげなければならない。そういうアドバイスなり報告なりを何故しないのか？

型どおりに「これができていない」「あれができていない」とケチをつけることに終始しては、いい子どもを育てられないのです。

能力の有る子と無い子がありますから「能力の無い子でも努力すれば進級が出来るよ」というふうに行って行かなければ魅力は無いでしょう。

是非ベンチャースカウトを地区でしっかり育てて、それが憧れの先輩の姿であるというふうに行って行っていただきたい。

昔はボーイの姿でしたが、今は違います。ベンチャーです。いくらでもいい考えが出てきます。任してごらん下さい。それで隊長がそれにアドバイスを与えればいいでしょう。是非考えていただきたい。

【 指導者の資質向上が最も重要 】
 それから4番目、最後ですが、この指導者の資質向上というのは、団でいえば本当に大事なことです。

スカウト出身の指導者が定着しない。大学へ行ってそのまま職場に行ってしまう。これは口実です。私の団だってローバーはちゃんと定着しました。そして隊長もスカウト上がりがやっています。だから市街化区域だったらなおさら出来るでしょう？

農村地域で本当に人口が増えないところでもやれるのですから、やれないという口実はやらないための口実であって、やる気が無いということではないでしょうか？

そして、スカウトも指導者でなければなりません。スカウトが指導者になっていかなければならない。ボーイスカウトで満足するだけでなく、本当に地域の、職場の、あるいは社会

の指導者に育てるといふ目標の中にスカウティングがあると私は思います。

ボーイスカウト運動の重要な「備えよ。常に」といふのは、そこじゃないですか？

学習塾に行ったり、部活動に行ったりするようなベンチャーやローバーでもちよつと発想を変えれば、結構、集会が出来ます。皆が集まれる時を探せばいいじゃないですか。

勝手にリーダーが「この日に集会しよう」といつてもなかなか集まらない。班長に渡して「場所も時間も決めていいぞ」と、これだったら出来ます。

大人の、リーダーの一存で「子どものためのスカウティングをやっていない」ということです。スカウティングというものは「子どものためのものである」。これが目的であり、原点であつたらその中で発想していくことが意欲的なスカウティングに繋がるのではないかと、私は自分の経験で申し上げている訳です。やれないことをいくら申し上げてもしょうがないので、私が今までやってきたことや、これからやるうとしていることを皆様方に今日は提案をさせていただきます。

【 今までの実践に基づく提案項目 「記録する」ということは非常に大事」 】

今お配りしているのは、古い資料です。平成5年に私が愛知連盟で最後に組織拡張委員長として団委員長研修協議会を持ちました。当時300名ほどの団委員長に資料を配っているとお願ひ申し上げました。皆様に差し上げたのは、その中の一部ですが、できるだけ具體的に、やれそうなことを皆様方に提案しています。

また提案した限りは、やるように仕向け、チェックし、評価していかなければならない。「よくやったな」「歩留まりが減った」「1人増やした。すごいぞ」そういう評価もやはり大事です。「各団1人スカウトを増やしましょう」ではどうしようもない。団の状況が違います。たくさん対象者がいるという地域もありますが、調整区域、農村区域という地域もあります。ですから、団委員長に働きかけるにしても実態に即しているんな方法で訴えていく必要があるのではないのでしょうか？

私は組織拡張委員長を仰せつかってから、ずっと会のたびに提案事項とか実践事項を渡してきました。その渡してきたものを事務局でまとめていただき「しっかりやってください」ということで皆様にも配らせていただきました。

先ほど申し上げたように「記録する」ということは非常に大事です。自分は忘れていくわけですが、「このときにこういふことを言ったのか」「これは今でも活かせるな」「今でも使えるな」というものが必ずあります。ですから是非記録をしっかりと取っていただきたい。（資料を配布）

【 身体で語れる指導者が感動を与える 】

私はここ6年ほど、大学の集中講義で「地域ボランティア論」を担当していますが、これはその時に使ったものの一部です。

例えば「身体で語れる指導者を」と表現したものがありません。

これは第7回の日本ジャンボリーが開催された時に、台風に遭い大変苦労した時のことです。台風のため雨水は一瞬にして川となりテントが流されそうになりましたが、ある隊長が自隊のフライテントを裂いてそれを土嚢代わりにして友団を助けていました。そういうことをできる指導者といふのはすごいです。このことに感激した1人ですが、こういう優れた指

導者もいる、隊長もいるということを書いたものと、全日本社会教育連合会から原稿を頼まれたときに書いたものです。これはいつまでも使えます。こういうことは大事です。

【一人ひとりを指導者に 個々のスカウトの能力も活用すべき】
次は「一人ひとりを指導者に」です。一人一人を指導者にしなきゃいけない。

日本では講師、先生というと、肩書きがあつて大学の先生みたいな人が講師だと考えがちですが、そうじゃない。高校生だつて立派な指導者です。

「一人ひとりを指導者に」の後半に、30年前にトーランス市（注記：アメリカ、ロサンゼルス市郊外の新興都市）に行った時のことが書いてあります。

高校の体育館で子どもたちが体操をしていました。「先生は？」と思つて見たところ、誰もいない。その女子体操部員が指導者になつて小学生をマット運動や鉄棒運動をやらせている。保護者は体育館の回りでそれを見ている。それで聞きますと、「本当にいいですよ。身近な存在のお姉さんから手ほどきを受けているので、本当によく子どもたちの成長がわかります」と…。

私は「これだ！」と思ひました。学歴とか資格とかよりも、皆が能力を持っているということ、そしてその持つている能力を何故使わないのか。ボーイスカウトだつてそうです。部活動でいろんなことをやっている子どもたちの能力を何故使わないのか。隊長だけが指導者じゃない、一人一人を指導者にするのだ、ということでも表現しました。

もう一枚の「張り合い、生き甲斐の持てる生活をしよう」という、これも大事です。誰も、不幸になりたいという人は一人もいません。皆幸せになりたい、生き甲斐を持つて張り合いのある生活をしたと思うている訳ですが、それに指導者として応えてあげるためには知識をもたなければならぬ。

【スカウトの基本的欲求を確認 「それが満たされているかどうか」】

それで「基本的欲求は、人間の本質である」という項目に簡単に表現していますが、人間の基本的欲求は、愛情欲求（愛されたい欲求）、支配欲求（やりたいことが実現できる欲求）、承認欲求（認められたい欲求）、所属欲求（気のおける仲間がいる欲求）、安全感欲求（不安がなく安全でありたい欲求）、そして大人だけの性愛欲求の6つに分かれています。

私も過去、相談所長などをやったことがあります。訪れる少年達に基本的な欲求を当てはめてみると、2つも3つも欲求が満たされていない。だから、おかしな行動を取るようになってしまふ。

欲求不満にさせておいてはいけません。

「非行しちゃうかん」「自殺をやめよ」と現象をいくら追つていても問題は解決しない。

スカウトが出てこない。何故欠席したのか。叱り飛ばしたつて出てきません。そのスカウトの基本的欲求が満たされているかどうか、これをチェックしてください。

この子は「認められたい」という承認欲求が欠けている、ならばもっと認めるように機会を作らなきゃいけない、家に帰つたつて劣等感の塊（かたまり）だな。そういうことがすぐに判ります。そうすれば方策が出てきます。欲求不満の結果がいろんな社会的な現象に繋がっていくのです。

フラストレーションを生じて社会生活に適應できなくなってしまう。この1つの目安として、そこに挙げています。

人間が幸せになるということや人間の価値というものは、頭がいい、悪いとか、顔がいい、悪いとか、成績がどうだ、こうだでは無いのです。精一杯生きているということこそ価値がある。しかも自分の能力を他に役立てている、奉仕活動をしているということに価値がある。

障害のある人でもそうです。そして少しでも役立つことを必要な人に提供できるような生活をしている。そういう人間の価値の秩序をしっかりと保っていかないと犯罪の絶えない社会が出来上がるということで、書き記しているのをご覧いただきたい。

【意欲と自主性を育む 「やる気にさせるにはどうしたらいいか」】

最後に「意欲・自主性を育む」ということですが、要はやる気にさせなければいけない。何でもそうです。やる気にさせるにはどうしたらいいか、動機付けをして、成功体験をさせてそして満足感を与える、そうすればやる気になる。こういうことを指導者として考えなければならぬ。

意欲的になれば、ほつといてもやります。ボーイスカウトの活動も一緒です。そんな訳でやる気にさせるにはという表現をしていますので、参考にしていただきたい。

以上勝手なことを申し上げる中で時間がまいりました。後は皆様方からご質問等がありましたら、答えられることはお答えします。

《 以下、参加者との質疑応答 》

（質問1）資料2頁の「登録」スカウト数による団・隊の健全度診断の推移表」における「危険、要入院」等の表現方法について、このまま使用するの躊躇いがありますか？

豊田地区の登録数で表現していますが、ボーイスカウトでいえば標準目標数が10名、最低目標数が3名ということになっています。願わくば、20名以上になれば非常に安定した隊になりますということ。下の方に「登録数による健全度診断の推移」が書いてありますが、これは一つの目安です。ですから絶対では無い訳です。一つの目安としてこういう表現をしています。それを総合的に言いますとスカウト数が29名以下では隊活動もあるいは団活動がうまくいく訳がない。ローパー隊だけの隊というなら別ですが、もっとスカウトを増やしていかないとうまくいかないということで、健康状態からいえば危険にある、放つて置けば死んでしまうという意味でこういう表現を使っています。もっといい表現があれば置き換えても結構です。それから要入院は30名以上39名まで、これは入院しなければいけないような緊迫した状態ということ。そして40名以上、これは要治療。これは薬を飲ませて治療しなければいい状態にはならないということです。

これは一つの努力目標、物差しとしてこういう表現をしておりますので、危険団が悪ければ他の表現でも結構です。私が勝手に書いたものですから皆さんそれぞれアレンジなさってもよろしいかと思えます。

（質問2） 地域のレベルによって評価基準が異なるので、それぞれの基準でよいのではないですか。又行政区を越えた活動をしたいが、きっかけになるヒントが欲しいのですが？

1つの単位団の運営を考えた場合にはある程度スカウトの人数が集まらないと継続ができない。立ち上げてそれで「おしまい」なら一握りでもいいと思いますが、ずっと継続して初めて大きな成果がある。子どもが大人になって、その大人がまた子どもたちの面倒をみるよな、継続していくということをお頭に置いて地域のエリアを考えていただくことが大事だと思います。ですから山間部であれば、小さな1個班をいくつか作り、それらが集まって合同で1つの隊を作ろうという発想もあると思いますし、それは地域性を考えてやっていただければいいことだと思います。ここで言っているのは標準団というのは長い目でみるとこうなるということ、そういうふうに努力していきましようということ、今申し上げたようにスカウトがどんどん成長できて、先輩を見て育っていく、先輩がまた後輩をみる、そういう組織を是非作っていただきたい。

例えば私の豊田でもある団は、地元ではなくて全市的に集めて作った団です。それで増えたからということ、地域に戻ってまた2個団作ったけれどもつぶれてしまった。その団も危なくなつて今必死に活動しています。ですからあくまでボーイスカウトは地域に根差した活動をしたいかなければならない。遠くから人を集めるという発想は長続きしません。地域に根差した活動、組織でいうと子ども会的な活動、そして精神はボーイスカウトの広い国際性をもつような組織に持つていくというふうな構成されたらうまくいくのではないのでしょうか。一つの決まったルールだけで縛らないように考えてやっていただきたい。中学校の中でボーイスカウトをやってみたら良かったという例をお話しましたが、いろいろな例があつていいのではないのでしょうか？

（質問3） 地区ごとの班づくりは、グリーンバーとスカウトとどう対応していいのでしょうか？

それがグリーンバーだと思っていればいいのではないのでしょうか？ その子どもを通してまた地域の子どもたちに影響及ぼすリーダーだと思っていけばいいと思います。

（質問4） 今より上を望むために社会環境の変化をどうとらえ、どう対応していけばいいのでしょうか？

人間というのは、ただより良き日本人であればいいとか、あるいは家庭人であればいいとかそういう狭い感覚だと国際社会に取り残されてしまいます。世界の中の日本であり、世界の中の地域社会であると捉えていきますと、優れた人物というのは国際的に通用する人物でなければならぬ。視野を広くして自分だけが幸せになるのではなく、自分の周囲の人も幸せにしてあげられる、そういう心のゆとりのある人でなければ世の中は良くならない。そしてその理念はボーイスカウトと同じです。

私が言いたいのは社会が云々でなくて、それを方向付けるのはボーイスカウトのリーダー

じゃないか、そしてそうあるべきだということです。地域社会のコミュニティがしっかりできていない。地域の人たちや近所の人たちが協力して皆で幸せになろうという体制がない。ボーイスカウトを通して、その精神を多くの人たちに持つてもらおう。地域社会のこと、自分の子どもだけじゃなく、近所の子どものも含めて幸せにしていくという広い視野に多くの人もっていくということがボーイスカウトの「一粒運動」じゃないかと思えます。

親御さんの理解を得て一緒に進んでいくという考えを持たないと駄目です。プログラムを全く伝えず集会をやっているはいけません。

例えば私の団では隊長が毎月保護者会をやっています。夜の7時すぎに家事を済ませてからスカウトハウスに集まってきて、「次のプログラムはこうです」ということで、個人面談もしながら保護者の啓蒙をしていくという活動を行っています。大人も子どもと共に成長していこうという発想が大事じゃないでしょうか？ 今の学校の教育が、地域から離れた学校だけのプログラム、あるいは保護者を無視したプログラム、これだから成功しない。

親御さんをしっかり握って「ごらんなさい」「先生の言うことを聞きなさい」と、今度は親が子どもたちを啓蒙していきます。保護者が協力してくれるということはボーイスカウトでも大事です。大人も参加して「いいな」という実感を持たえながら啓蒙していくということであれば地域社会を変えていく機会になるのではないですか。

長年ボーイスカウトをやっていると、地域が評価してくれるようにもっていくことが大事です。ボーイスカウトは金持ちの集まりだとか、エリートだとかそんなふうにいわれるような団活動では駄目だと思えます。回りの人たちが愛されて、回りの人も参加させてほしいといわれるような方向付けをすればいいんじゃないですか。

イベントなども地域の人を巻き込んだイベントを考えていくことも一つの方法です。

だからボーイスカウトの組織というものは、すごく素晴らしいのです。なぜうまく活用しないのか。これは関係者の努力不足だということになります。自分の団だけじゃなくもっと広いエリアで人づくりを考えていく、そういう体制になっていただきたい。

愛知のお話をしますと、愛知の役員はすごくいいです。人間がいい。日本連盟に役員を出すすと皆バックアップします。どこかの県のように出しておいた梯子を取っちゃうようなことでは駄目です。そういう人間性の欠けたリーダーがいっぱい居るようなところでは発展しない。私が胸を張って言えることは、愛知は理事長をはじめ「みんないい」のです。まじめ、そして皆愛しています。その点でどこの県よりすごいと思っています。私が離れていてもちゃんと役割を与えてくれますから。

以上

表 - 1 ボーイスカウト日本連盟「加盟登録者数」の推移

和暦年度	ピーク年 (注: 和暦は「年度」表示であり、数値は年度末 = 翌年の3/31時点の数字) (= 前年度数より「減り幅」減の年)											
	S58	S59	S60	S61	S62	S63	平成元	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6
加盟員総数	331,985	325,574	314,177	305,750	298,651	290,438	276,424	268,818	263,460	261,069	256,688	252,379
(対前年度総数増減数)	5,512	6,411	11,397	8,427	7,099	8,213	14,014	7,606	5,358	2,391	4,381	4,309
スカウト合計	233,473	227,172	217,456	211,059	204,950	195,508	187,171	181,486	177,026	174,774	170,988	167,316
対前年度スカウト増減数	2,671	6,301	9,716	6,397	6,109	9,442	8,337	5,685	4,460	2,252	3,786	3,672
団数	3,919	3,917	3,909	3,869	3,794	3,743	3,663	3,577	3,484	3,429	3,380	3,338
1こ団平均スカウト数	59.6	58.0	55.6	54.6	54.0	52.2	51.1	50.7	50.8	51.0	50.6	50.1
				9NJ				10NJ				11NJ
1. 経営責任者 理事長	寺尾 一郎 (2年間 3,630)		井深 大 (10年間 59,856)									
2. 経営執行責任者 常務理事												上島真一郎(続)
3. 基準維持責任者 総(本部)コミッショナー	村田正雄 (6年間 35,294)						鈴木了正 (6年間 28,192)					
4. 組織窓口責任者 組織(総務)委員長	東野 一郎 (2年間 3,630)		小林 明 (4年間 31,664)				宇野真之 (4年間 20,734)			石田菊美 (続)		
5. 事務執行責任者 事務局長	石川 一郎 (5年間 25,852)						荒尾雅也 (7年間 37,634)					

[注: 標記の氏名後の () 内は任期年数と任期中S数増減数]

表 - 1 (上段表の続き)

和暦年度	今年度(対S58年)												
	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	H 17	H18(確定) = ピーク年の	
加盟員総数	248,591	247,279	242,782	236,367	230,107	222,560	213,637	207,688	202,069	196,554	188,620	180,466	54.4%
(対前年度総数増減数)	3,788	1,312	4,497	6,415	6,260	7,547	8,923	5,949	5,619	5,515	7,934	8,154	-
スカウト合計	164,467	163,736	159,692	154,292	148,914	142,443	135,118	130,460	126,929	122,766	116,841	110,746	47.4%
対前年度スカウト増減数	2,849	731	4,044	5,400	5,378	6,471	7,325	4,658	3,531	4,163	5,925	6,095	-
団数	3,289	3,255	3,222	3,187	3,159	3,117	3,059	3,020	2,977	2,917	2,860	2,791	1,128
1こ団平均スカウト数	50.0	50.3	49.6	48.4	47.1	45.7	44.2	43.2	42.6	42.1	40.9	39.7	-19.9人
				12NJ				13NJ				14NJ	
1. 経営責任者 理事長	佐波正一 (11年間 50,475)											橋本綱夫 (6,095)	
2. 経営執行責任者 常務理事	上島真一郎 (13年間 60,242)												
			(杉原 正)	(杉原 正)	(杉原 正)	(石田 文夫)	(石田 文夫)						
3. 基準維持責任者 総(本部)コミッショナー	杉原 正 (6年間 24,873)						鈴木国夫 (4年間 19,677)			伊藤智是 (2年間 12,020)			
4. 組織窓口責任者 組織(総務)委員長	石田菊美 (4年間 11,038)		鈴木国夫 (4年間 21,293)				富岡賢一 (4年間 19,677)			渡邊富昭 (2年間 12,020)			
5. 事務執行責任者 事務局長	石川嘉唯 (3年間 7,624)			高井英行 (5年間 29,232)				若山裕司 (3年間 13,619)			金井昭二 (6,095)		

表 - 2 平成17～18年度における「組織拡充11事業」への、県連盟の参加状況表

県	行事名 県連盟	H17年度 組織拡充 セミナー	H18年度 全国大会 テーマ集会	14NJ 組織拡充 談論コーナ-	H18年度 組織拡充 セミナー	H17-18 県連訪問 (7県事業)	11事業 参加状況 (回数)	県	行事名 県連盟	H17年度 組織拡充 セミナー	H18年度 全国大会 テーマ集会	14NJ 組織拡充 談論コーナ-	H18年度 組織拡充 セミナー	H17-18 県連訪問 (7県事業)	11事業 参加状況 (回数)								
																01	02	03	04	05	06	07	08
	北海道						0	25	滋賀	1			1		2								
	青森		1				1	26	京都	1	1	1	1	1	5								
	岩手	1	1		1		3	27	兵庫	1	1		1		3								
	宮城	1					1	28	奈良	1	1	1	1	1	5								
	秋田	1				1	2	29	和歌山	1					1								
	山形				1		1	30	大阪	1	1	1			3								
	福島	1			1		2	31	大鳥取		1				1								
	茨城	1	1		1		3	32	島根	1					1								
	栃木				1	1	2	33	岡山	1			1		2								
	群馬	1	1		1		3	34	広島	1	1		1		3								
	埼玉	1					1	35	山口	1			1		2								
	千葉	1	1	1	1		4	36	徳島	1	1				1								
	神奈川		1		1		2	37	香川	1	1	1	1		4								
	山梨			1			0	38	愛媛	1	1	1	1		4								
	東京		1				2	39	高知						0								
	新潟				1		1	40	福岡	1	1	1	1	1	5								
	富山				1		1	41	佐賀						0								
	石川	1	1		1		3	42	長崎				1		1								
	福井		1		1		2	43	熊本						0								
	長野	1	1		1		3	44	大分	1	1	1	1	1	5								
	岐阜		1		1		2	45	宮崎	1	1		1		3								
	静岡				1		1	46	鹿児島						0								
	愛知	1	1		1	1	4	47	沖縄		1				1								
	三重	1			1		2																
	上記小計	12	12	2	17	3	-		上記小計	15	13	7	13	4	-								
									参加県連盟数合計	27	25	9	30	7	-								
									(単位)	県	県	県	県	県	-								

注1: 印 = 「組織拡充11事業」とは、上記表の行事名に記載のある「 ~ 」までの行事と、7県連盟への訪問事業(計11)を表す。

注2: 「県連盟」の網掛け = 〇 は、11事業のうち、「*1回でも参加の県連盟」であることを表す。

注3: 「*」印の過去2年間における「11事業」に1回でも参加の県連盟数 = **41県連盟 (41/47 = 87.2%の参加率)**